哲学研究とモラル

赤　井　清　晃

【キーワード】略号，引用表記，重訳，誤訳，モラル

1．はじめに

広島大学が定めている，ティーチング・アシスタントの中に，　　という略号で表記されるものがある．これは，フェニックス・ティーチング・アシスタント（　　）の略号であると言われて，違和感をもたない人は，いかがなものか，と言わざるを得ない．ギリシア語やラテン語などの西洋古典語の素養のある，知り合いの欧米人にもたずねてみたところ，やはり，　　を　　と略すことには，違和感をもつとの返答であった．

では，どういう略号にすれば，違和感がないかと言えば，例えば，　　（または，　．．．）とすればよかったのである．というのも，　　は，もともと，ギリシア語のΦοῖνιξ（ポイニクス）を，ローマ人がラテン語で，　　と音写したものを，英語でも，そのままの綴りを用いているので，語頭の　は，　というひとつの文字を表わしているから，　と　は，分けることができない一文字として扱われるからである．これと同じように，　　というのは，ラテン語の　　の略であるが，語頭の　は，ギリシア語の　というひとつの文字を表わしているから，　と　は，分けることができない一文字として用いられている．固有名（例えば，都市名）でも，　　は，　　の，　[1]は，　　の略号であって，全体で３文字という制約の中でも，　の　を省略していないのは，　が，本来一つの文字だからである．

しかし，どうしてこういうことになってしまったのか．その経緯は詳らかにしないが，　という略号の提案者も，大学としてこの略号を採用する過程にかかわった人たちも，ギリシア語やラテン語などの西洋古典語の素養がなかったか，仮にあっても，この略号の提案者に，修正をもとめることを差し控える，何らかの理由があったのかもしれない，と推測することしかできない[2]．略号など，人為的に使いやすいように決めればよいのだし，ことばは変化していくものだから，何を言っているのか，と或る学生に言われたことがある．大学にも，いろいろなレヴェルがあるだろうが，これでよいのかという思いは禁じ得ない．ここには，大学の構成員全体の学識がどのようであるかとか，大学が組織として何かを決定するときの手続きの問題とか，さまざまな事情があるようなので，個人がどうこうできることではないけれども，誰も何も言わなかったということでは，なさけないので，少なくとも，文字化して，誰でも読めるようにしておくのは，意味がないことではないだろう．

さて，この種の問題は，広い意味での哲学にかかわる領域でも見られることである．ヤスパースは，彼の著作『哲学』(1931）へのあとがき（1955）で，次のように述べている．

> Es ist eine merkwürdige Erfahrung: Wärend in einer Wissenschaft die meisten Veröffentlichungen interessieren, die unergiebigen schnell erkannt werden, im Ganzen sich eine gemeinsame Arbeit darstellt, in der auch der Kleinste seinen nützlichen Beitrag leistet, ist es in der Philosophie umgekehrt. [K. Jaspers, Nachwort(1955) zu meiner *Philosophie*(1931), *Philosophie I*, S. XL, Berlin-Heidelberg: Springer.]
>
> ここに一つの注目すべき経験がある．--- 或る科学においては，殆どの諸々の出版物が関心を呼び，不毛な出版物は速やかに識別せられ，全体として或る共同の労作 --- これにおいては最も小さなものでもそれの有益な寄与をなすのだが --- が明示されるのに，哲学においては事情が逆なのである．［ヤスパース／鈴木三郎訳，「私の『哲学』(1931）へのあとがき（1955)」，『形而上学 哲学　』所収，p. 303.］

さらに続けて，次のように述べていることが注意をひく．

> Zwar scheint man von derselben Sache, der Philosophie, zu sprechen, hat stoffich scheinbar gleiche Themata, gehört demselben Ressort unter den akademischen Fächern an und vermag sich doch nur in geringem Umfang gegenseitig zu interessieren. Ich vermute, daß die „Philosophen“ der Gegenwart einander sehr viel weniger lessen, als es die Fachvertreter der Wissenschaften je in ihren Gebieten tun. [a. a. O.]
>
> なるほど人々は同じ事柄，哲学について話すように見え，材料としては一見同一の諸テーマをもち，大学の専門諸分科の間で同一部門に所属しているが，しかもただ僅少な範囲で互いに興味を有しうるだけなのである．私の推測では，現代の「哲学者たち」は，諸科学の専門分科の代表者たちがいつも彼らの諸領域でするよりも，ずっと少なくしか互いのものを読んでいない．［同上］

これ[3)]を読んだとき，これではいけないと，私も大いに反省を強いられ，直接，自分の研究領域にかかわるものでなくとも，できるだけ読めるものには，目を通さなければならないと意識するようになった．そして，いろいろなことに気づいたが，これは，自分が学生として学んだ大学では，学士論文（いわゆる，卒業論文）でも，認められず，書き直しをもとめられるだろうという事例に遭遇した．それらは，本来，学部在学中に身につけておくべきことがらである．それらのうち，これから論文を書く人にとってわかりやすいように，いくつかの典型的な事例に分類し

て取り上げる．

２．引用の出典表記について

そういう例として，次のようなものがある（これは，紀要に載った自分の論文の欧文要旨に綴りの間違いがあったのを見てがっかりして，パラパラとページをめくっていて，偶然，目についたものであって，さがして見つけたものではない）．

> では、トポスの意味での「場」とは何か。それを知るためにアリストテレスの『自然学』の第４章を瞥見しておこう。３）
> アリストテレスは、その冒頭で「場」とは何であるかと問うて、「場」を次のように規定する。すなわち、・・・（略）・・・を可能にするものであると。４）
> 注
> ３）参照文献は、『世界の名著（９巻）ギリシアの科学』（中央公論社　1972年）に収められている『自然学』（藤沢令夫訳）である。なお、次の英訳も適宜参照した。　, *The Physics II*,　. 4,　.　.　&　.　,　. 1980.
> ４）同書　106頁参照。　.　, *op.cit.*　.303 .（松井富美男、2009、「老いの「場」に関する基礎的研究」、『広島大学大学院文学研究科論集』、第69巻、1-19.（ . 3および　. 13の注3)、4)）

ピリオドの後のスペースの有無など，細かいことはおくとして，ここで，最初に，「アリストテレスの『自然学』の第４章」とあるのは，「アリストテレスの『自然学』の第４巻」とあるべきところである．より正確に言えば，「アリストテレスの『自然学』の第４巻第４章」であるが．そして，注４）（および，省略した注７）まで）は，藤沢訳のページ数を示した上に，
と　　の英訳のページ数が示されているのはよいとして，そもそも，学問的にアリストテレスを引用するのであれば，ベッカー版による箇所を示すべきである．注３）の場合は，210 33～211 6ということになろう．もっとも，行数までは，原典にあたらなければ正確にはわからないし，この著者が参照している　　版の希英対訳のギリシア語はベッカー版とは改行の仕方が違うので，ベッカー版か，ベッカー版の改行に忠実な版を参照しなければならないだろう．しかし，藤沢訳には，欄外に，ベッカー版のページ数と　,　の指示があるので，少なくとも，210～211　ということはわかったはずである．哲学者の著作を引用したり，言及したりするときには，その哲学者の著作を引用する際の箇所の表記の仕方が，ほぼ，国際的にルールが決まっている場合と，そうでない場合がある．ほぼ，決まっている場合の一例が，アリストテレスの場合であり，翻訳書のページ数を示す場合でも，それが原典のどこに相当するのかをまず示す必要があ

る（藤沢訳のように，文献学的に配慮した翻訳書には，その本のページ付けとは別に，ベッカー版のページ数と ， の指示がある）．しかも，この論文の場合は，翻訳を検討することが課題ではないから，むしろ，まず，アリストテレスの原典の箇所を示すべきであった．カントの『純粋理性批判』から引用するにあたって， 444/ 472と書かけばわかるところを，例えば，カッシーラー版の巻数とページ付けで示されたら，カッシーラー版をみなければわからない，ということになるので，カッシーラー版そのものの研究でもない限り，そういうことはしないであろう．この著者は，アリストテレスを引用する際の常識がない，ということになる．もっとも，この論文の著者は，倫理学担当なので，倫理学の分野では，これでも通用するのかもしれない（倫理のことは私には分からないけれども，広い意味であれ，哲学をやっていると主張するのであれば）が，少なくとも，哲学では通用しない，と学生諸君は肝に銘じてもらいたい．これが「哲学」の分野であれば，学部の卒論でも書き直しを要求するところである．ここで，どうしても，ニーチェの次の言葉を思い出してしまう．

, , ,
. ; ,
. [, *Der Wille zur Macht,* 912 ( )]

> 私は、適当な時期にすぐれた鍛錬を怠った者が、ふたたびそのつぐないをしうるとは、けっして考えない。そうした者は、おのれを知ることなく、歩行を習得しておかないままで生涯を歩みたどるのである。（ニーチェ『権力への意志』／原佑訳）

哲学・西洋哲学史の学問的トレーニングということに即して，具体的に言い直すと，少なくとも，学部生の時期に，ギリシア語やラテン語の文法を学び[4)]，ある程度，それらの原典を読む演習に出席して，先生に間違いをただされつつ，読解力を身につけ，学問的な引用・言及の仕方を学んだ者でないと，年をとってからアリストテレスなどを引用しようとすると，たとえ，既存の定評のある翻訳を用いても，引用の表記の仕方が素人すぎてみっともない，ということが起こるし，それは，学部生のうちに身につけておくべきことである．

アイソポス（イソップ）物語のモラル風に言えば，文献を引用・言及する際には，その文献を引用・言及する慣例となっている方法が存在するかどうかを調べて，それがあるならば，それに従うべきである[5)]．

3．重訳について

さらに，次のような例もある（これも，当の著者から「読まなくていいです」と言われて，この著書をいただいた際，ながめるだけならいいだろうと，ページをめくっていて目についた箇所

なので，読んで見つけたわけではない．これについては，『比較論理学研究』第十二号の K. AKAI, Commentarium Primum in ‘Sibi Scribere’, pp. 1 - 6の特に，p. 2と二つの footnote を参照されたい）．

> このように、アリストテレス倫理学は、人がいかに行為すべきかだけでなく、行為への性格付けに基づいて、つまり「まったく規定された、確固たる根本姿勢に基づいて」、そのように行為する人であり得るかをも主題にする（　1137；　1980, 103）。（後藤弘志、2011、『フッサール現象学の倫理学的解釈　習性概念を中心に』、ナカニシヤ出版、 . 159）

この著作は，もともと全体がドイツ語で書かれものだった（ドイツ語で書かれた学位論文）．そして，アリストテレスからの引用も，ギリシア語ではなくて，ディールマイヤーのドイツ語訳に基づいている．凡例で著者自身がアリストテレスについては，ドイツ語訳に基づく，とことわっている．しかし，アラビア語訳やラテン訳しか手に入らなかった中世のある時期ならともかく，ギリシア語原典が手に入り，たとえ自分でギリシア語が読めなくても，ギリシア語から直接訳された訳文が複数手に入る今の時代に，わざわざ，ドイツ語から重訳するのは何故なのか？[6)]
さて，引用箇所については，古典に素養のある学者ならば，『ニコマコス倫理学』のラテン語訳の書名 *Ethica Nicomachea* を略して，*EN* とするところだが（そして，これが慣例になっている），ドイツ語訳の書名 *Nikomachische Ethik* を略して，ドイツ語の文献では見かけることのある，
としているが，それはよいとしよう．（英語だけでアリストテレスを扱っている人たちも，英訳のタイトルの略号として，　としていることが目につくようになってきた）．なお，同じページで目についてしまったことは，アリストテレスのプロアイレシス（プロ・ハイレシス）を「選択的意思決定προαί-ρεσις」と２行にまたがって，分綴したギリシア語を添えて表記しているが，ギリシア語を添えて分綴するなら，

「かくかくの状態（ヘクシス）にあることによってそれに基づく行為をなす」ということ（高田三郎訳、岩波文庫、上、206ページ）

自分自身がそういう性質のものであるためにそのようなことをする（加藤信朗訳、全集13, p. 175）

行為者がある特定の性格の状態であることによってそうしたことを行なう（朴一功訳、西洋古典叢書、p. 242）

一定の性向を保持して、そうしたことを行う（神崎繁訳、全集15, p. 219）

（ラテン訳）［ , *In EN Expositio* に付されたラテン訳、 版、 . 292］

（ラテン訳）［*Aristotelis Opera,* 1831に付されたラテン訳、 版、 , . 562 ］

（英訳）［ , 版、 . 131］

（英訳）［ , , . 311］

（仏訳）［ , . 264］

（仏訳）［ , .151］

（伊訳）［ , *Opere,* 3 ., . 573］

（伊訳）［ , . 219］

（独訳）［ , , . 111］

（独訳）［ , . 149］

（独訳）, ［ , 版、 . 117; 版、 . 147］

τὸ ὡδὶ ἔχοντα ταῦτα ποιεῖν

版、 . 292］

（ラテン訳）　［*Aristotelis Opera*, 1831に付されたラテン訳、　版、　, . 562 ］

（英訳）　［　,　版、 . 132］

（英訳）　［　,　, . 312］

（仏訳）　［　, . 265］

（仏訳）　［　, . 152］

（伊訳）　［　, *Opere*, 3　., . 574］

（伊訳）　［　, . 221］

（独訳）　［　, . 149］

（独訳）　［　,　, . 111］

（独訳）　,　［　,　版、 . 117;　版、 . 147］

これらのテクストと参考に掲げた翻訳を比較するとわかることは，1137 8-9のディールマイヤーのドイツ語訳だけがちょっと違うということである（　も，einem festen Habitus とかeinem bestimmten Habitus としているが，これも Habitus がヘクシスのことならば，festen やbestimmten は本来余分である．Dirlmeier は，Rolfes の２カ所の訳を合体してさらに強調したようなものになっている．その点，Gohlke は，あっさり訳していて的確である）．因みに，の当該論文は，直接この箇所に言及しておらず，　とかあるいは　と言っているだけである．1137 8-9と1137 23の違いは，ἔχοντας とἔχοντα の違いであって，拙訳によってその違いはあきらかであると思うが，それよりも問題なのは，ὡδὶ（かくかくの，ある一定の）の意味である．1137 8-9で，

Es giebt ehrlich gemeinte Übersetzungen, die beinahe Fälschungen sind, als unfreiwillige Vergemeinerungen des Originals. [Nietzsche, *Jenseits von Gut und Böse*, 28, KSA5, S. 46 (Kröner, Bd. 7(KTA76), S. 38)]

忠実にくわだてられた翻訳だというのに、知らぬまに原文の格調を汚してしまったものとして、ほとんど偽作だといっていいようなものもある。（ニーチェ／信太正三訳『善悪の彼岸』より）

たしかに，ドイツ語では，　　！と言うと，「絶対確実！」という感じだろうが，アリストテレスのテクストには，これに相当する部分がない．これは，原典（すなわち，アリストテレスのギリシア語テクスト）を読んでいれば生じなかったことであろう．ギリシア語を読めなくても，せめて，ディールマイヤー以外のドイツ語訳か，イタリア語訳あるいはフランス語訳や英語訳を参照していれば，ディールマイヤーの訳文を日本語に直訳することは，躊躇したのではないだろうか．ディールマイヤーのドイツ語は，二十世紀半ば（初版は1956年）のものであるから，これを云々する資格は私にないが，もし，ディールマイヤーのドイツ語訳が，正しくギリシア語を翻訳しているとすれば（もっとも，かなり意訳されているのだが），当該箇所は，「ある（einer）全体として（ganz）一定に定まった（bestimmten），しっかりした（festen）基本的なこころの状態（Grundhaltung）に基づいて（auf Grund）」くらいになるのではないか（これは，逆に，ドイツ語をギリシア語に引き寄せているので，ドイツ語だけをみるとやはり，ちょっと無理があるように思うが）．しかし，これならば，ヘクシスのことを言っているのだな，とわかるであろう．この箇所に関して言えば，ディールマイヤーは，ギリシア語を，どちらかといえば，意訳してドイツ語にしているというべきで，その意訳されたドイツ語をそのまま，日本語に逐語訳した結果，上述のようなことになってしまったのだろうと推測される．しかし，私には，ドイツ語のことを云々できないので，ディールマイヤーがこう訳した真意はわからない．

全体の地の文がドイツ語の学位論文の中で，アリストテレスから引用するにあたり，ギリシア語から直接ドイツ語に訳した，ディールマイヤーのドイツ語訳を掲げることは問題がないだろうが，全体を日本語にするに際して，ディールマイヤーのドイツ語訳の部分を，ギリシア語から直接日本語に訳した，既存の日本語訳を用いずに，ディールマイヤーのドイツ語訳から，さらに日本語に重訳，しかも，ディールマイヤーのかなり意訳されたドイツ語訳を，日本語に逐語訳（直訳）しているものだから，「ヘクシス」に相当する部分が，「まったく規定された、確固たる根本姿勢」という画期的な訳になってしまったのであろう．この本はすでに出版されて市場に出ているので，アイソポス（イソップ）物語のモラルの代わりに，ホラティウスの次の警句が思い起こされる．

> Nonum[que] prematur in annum, membranis intus positis. [Horatius, *De arte poetica*, ll. 388-389]
> （原稿を）家の奥深くしまって、九年目まで待たなければならない。（ホラティウス『詩学』より）

というのはよく知られていると思うが，実はこの後が大事である．

> delere licebit / quod non eddideris ; nescit vox missa reverti. [Horatius, *De arte poetica*, ll. 389-390]
> まだ公けにしていないものは破りすてることができるけれども、言葉は一旦放たれると後戻りができない。（ホラティウス『詩学』より）

学部の「西洋哲学」の分野では，上記のような事例があれば，私ならば，学部の卒論でも書き直しを学生に要求するところであることは間違いない．実際，学生たちには，こう言っているからである．引用・言及する原典に直接あたること，これがなによりも重要である．しかし，原典を容易に手に入れることができない場合もあるかもしれない．その場合でも，各国語への翻訳が複数あるならば，ひとつの翻訳だけで満足せず，手に入る限りのものを調べてみることが必要である，と．

3．誤訳

かつて，西洋哲学研究会という院生が中心に活動した研究会の発表の中で，院生の某君がジープの論説を引用した訳文が，わかりにくいので，質問したところ，某君は，それは某先生の訳だというので，みんなそれ以上，追求するのはやめて，自分で訳したらいいだろう，ということでうやむやになったことがある．それは，具体的には，ルートヴィヒ・ジープ（山内廣隆訳）「ヘーゲルとヨーロッパ」（『みすず』 第四十六巻九号，　. 521, 2004,　. 46 – 60）の中で，

> そうした有機的自由という理念はおそらく、主権的な個別国家という『水準』以下に全体としてもありつづけるヨーロッパの連合において実現されたのである。（ . 58 下段）

とある箇所で，ジープの原文では（　　は，誤入力で，正しくは，　　と思われる），

,　　“　　”　　(.19).

[: - 388
, , , 2003]

となっている．これを試みに訳すと，

> 有機的な自由という、そういう理念は、ひょっとすると、全体としてひとつの主権的な個別国家という「水準」以下にとどまるような連合的ヨーロッパ（ヨーロッパ連合）においても、実現されうるかもしれない。（赤井試訳）

というくらいの意味であって，（接続法二式）というのは，山内訳のように，断定的ではないはずである．また，時制に関しては，可能性としては，「ひょっとすると、実現する可能性があったかもしれない」というほうが正確かもしれない（過去における非現実の帰結）．同じようなことを言っているので，大した違いはないではないかと思う人がいるかもしれないが，事態としてはまったく違うことを言っているので，この違いは大きいと言わなければならない．このことがあってか以後，書かれた論文で，「拙訳に，若干修正を加えた」と断りの註付きで，

> そうした有機的自由という理念はおそらく、全体として主観的な個別国家の「水準」以下にとどまっているヨーロッパの連合においても実現されうるであろう。（山内廣隆「ヘーゲル政治哲学の現代的意義」、『政治哲学』第８号、2009, . 65）

と訳し直しているようであるが，をあいかわらず，「おそらく」と訳していて，なんだか，楽観的で明るい未来を期待できそうな訳文になってしまっている．自分がどう思おうが，それとは関係なく，まず，テクストを厳密に読むという哲学史研究とは違う方向を向いているように思えて仕方がない．

しかし，テクストからはずれて，テクストを書いている原著者の言なのか，翻訳者の気持ちを言っているのかわからなかくなっている例としては，クラウス・マイヤー＝アービッヒ／山内廣隆訳（2005, 2006,『自然との和解への道』上・下、みすず書房）がある．卒論や修論で，この本に言及したり，引用する学生がいたので，それらに引用される訳文は，読まざるを得ないので，その中で気付いたことを，いくつもあるのではあるが，典型的な事例を，ひとつ，ふたつ取り上げる．

まず，訳語のレヴェルで，訳書に原語が併記されているので，わかりやすいのが，上巻，一九四頁から一九五頁にかけての「仮説的イデア（ ）」という件である．ドイツ語の意味が理解できていないのか，日本語の表現力に問題があるか，それ以外の理由によるのかは

わからないが，「仮説的イデア（　　）」は，ありえない．もし，「仮説的イデア」と言いたいのならば，　　と言うであろう．そうではなくて，　　というのは，「イデアを仮設すること」「イデアの仮設」という意味である．ちなみに，ギリシア語の「ヒュポテシス」の原義に基づいて，「仮説」ではなくて，「仮設」という漢字をあてるのは，某学派の流儀に従っての表記である．従って，「ヒュポテシス」の訳語として「仮説」のほうを使うと，かえって素人っぽく見えてしまうのである．「イデアを仮設すること」と「仮説的イデア」とは全く違うので，これらを区別して理解できないならば，哲学をするには向いていない，と言わざるを得ない．

もうひとつ，以下のような箇所がある．

> 全人類を包括する倫理は、第三世界の窮乏に直面して少なくともそれがいかにして起こったのかを認識しなければならない。さらにわれわれがその責任を負わされているわれわれの自然的共世界の窮乏に直面して、人類はいつも自分自身のためにだけあるのではないということを想起しなければならないときになっている。（前掲書・上巻、 . 90）

これを読むと，なるほど，そうだなぁ，よし，自分たちも頑張るぞ！となんだか元気が出るような，ありがたい文なのではある．ここの原典は，

> ,　　,
> .　　,
> ,　　,　　,
> .［　　-　　, 1984, *Wege zum Frieden mit der Natur*,　. 51］

となっていて，私が訳すと，

> 第三世界の窮乏に直面して、少なくともまず最初に、全人類を包括する、ある倫理（学）が、認識されなければならない。広範囲にわたって、我々によって責任がとられなければならない、自然的共世界の窮乏に直面して、いつも人間は自分だけのためにあるわけではない、ということを、この窮乏に向かい合ってまた、我々は思い出すべきときがきている。（赤井試訳）

となってしまい，なんだか，しんどそうで，あまりやる気がでない文になってしまう．しかし，

アービッヒが言っていることは，こういうことなので，山内訳とは，あっちこっちでちがうところがある．いや，全く違うと言わなければならない．これは，卒論レヴェルでも，書き直しを要求するところであるが，そういう要求をするべき側の教員がこのレヴェルだ，ということである．

すこし，細かくみると，具体的には，まず，「それがいかにして起こったのかを」という部分は，どこを訳したのか？　まったく，このような訳は，「それがいかにして起こったのかを」説明してもらいたいところである．それに，　　というのは，「少なくとも最初に」くらいの意味であるが，ここでは，　　は，「端緒，最初の試み，手がかり」という意味であろう．これが訳されていないのは，まだよいけれども（ほんとによいか？），一番重要なことは，二回でてくる，（主語）　（他動詞・能動）不定詞　　の意味である．いずれも，（主語）は，（他動詞・能動）不定詞　されるべきである，という，可能または必然の受動の意味になる，ということは，文法を学んだ者ならば知っているはずであるが，しかし，この翻訳では二回ともまったく無視されているのはどうしたことであろうか．これは，翻訳というよりは，ドイツ語を読んで思いついたこと，連想したことを，たぶん，こういう方向だろうという内容を，自由に書き綴ったものという感じがするのであるが，読者はどう感じるだろうか．これに関連して，アイソポス（イソップ）物語のモラルの代わりに，思い起こすのは，ニーチェの訳書の「あとがき」にある，川原栄峰氏の次のことばである．

> ところで、ソクラテスは「無知の知」を説いた。翻訳をしていて一番こわいのはこれである。自分が無知だと知っておれば、調べることもできるし、人に尋ねることもできる。ところが無知だと知らず、これでいいのだと思いこんでしまっている場合、救われようがない。誤りまたは不十分である自分の翻訳も表面的には意味が通る場合が多いのである。（川原栄峰訳『ニーチェ全集15 この人を見よ、自伝集』1994年、ちくま学芸文庫版、 . 514）

４．概括

先に引用した，ヤスパースの「あとがき」を読んだばっかりに，前述のような事例に気がついてしまったが，気がついたと思っている私が間違っているのか，私が，学部生，大学院生として，「哲学」という専門分野で指導を受けて学んできたことは，この大学では通用しないのか，「哲学」という分野に限定しなければ，これでよいのか（たぶん，よくないはずである），また，前述のような事例に気がついている人は自分だけなのか，他にも気づいている人がいるとすれば，その人は，何故，沈黙しているのか，沈黙せざるを得ない理由があるのか，そうであるとすれば，それはどういう理由なのか，と疑問は尽きない．

これらは，いずれも公にされている文献上のことなので，学問的な扱いややりとりができるは

ずであるから，一層疑問である．前述のような事例に気がついている人がいないとすれば，それはそれで大学として，学問上のレヴェルで問題であるし，前述のような事例に気がついている人がいるのに，何らかの理由で沈黙しているとすれば，それはそれで，別の観点から問題である，と言わざるを得ない．

査読を受けている論文だからとか，博士号をもつ人の書いた物だからとか，設置審を受けているから，ということは，当該の専門分野外の者にとっては，ある程度，評価や判断の材料にはなるだろうが，査読者や，学位請求論文の審査員や，設置審の担当者の学識がどのようなものであるのかはわからないので，そういった評価や判定は一旦置いておいて，たとえ，自分の専門領域外の事柄であっても，自分の能力によってわかるかぎりのことを，直接，当該文献にあたってみることが必要である，というしごく当たり前ではあるが，実は，実行されていないのではないかと思われることを，実行してみた結果の，ごく一部分の報告である．

註

[1] 都市コードのように，３文字という制約がなければ，　　とするだろうが，いずれにせよ，ではなく，　とする．

[2] かつて，ティーチング・アシスタントに関する　　に出席した際，　　という略号が使われていることを知り，その　　を担当していた教員に，事情を説明する文書を送って，可能であれば，　を　　に変更するほうがよい旨を伝えたけれども，その後，何の音沙汰もなく，今に至っている．

[3] さらに，ヤスパースは，次のように続けている．

Zwar gibt es die Konvention einer gemeinsamen Forschung, von Kongressen und Zeitschriften. Man hat sich gewöhnt zu reden von „Fortschritten“, die gemacht werden, neuen Entdeckungen, neuen Ansätzen. Man hat sich gewöhnt zu reden, als ob ein großartiger gemeinsamer Arbeitsweg gegangen werde, wie in den Wissenschaften. [a. a. O.]

なるほど或る共通の研究とか，諸々の学会や雑誌とかの慣習は存在する．人々は，為される「諸々の進歩」や，諸々の新しい発見や新しい手始めについて語ることに慣れてしまった．人々は，恰も或る大規模な共同の作業の道が，諸科学における如く歩まれるかのように語ることに慣れてしまった．［同上］

Aber es scheint, daß, je selbstverständlicher so gesprochen wird, desto weniger die entsprechende Realität da ist. Wir sehen einen Betrieb von Monologen und von konventionellen Diskussionen in Form aneinandergereihter Monologe, und eine Gemeinsamkeit kleinerer Gruppen, die, wenn sie sichtbar werden, einen Augenblick auffallen, aber bald wieder sich auf ösen. Woran liegt das? [a. a. O.]

しかし，自明的にこのように語られれば語られるほど，それに相当する実在性は益々より少なくそこに在るように見える．われわれは数々の独白や，目白押しに並んだ数々の独白の形をとった諸々のお定まりの討論が活況を呈しているのを見る．また，連合をなす，さほど大きくない諸々のグループを見るが，これらのグループは，それらが見えるようになる時，一瞬目立ちはするが，しかし間もなく再び解散してしまうのである．この責任はどこに帰せられるのか．［前掲書，pp. 303 – 304.］

4) 筆者が院生として学んだ当時の，某大学では，専門分科として，「哲学」「西洋哲学史（古代）」「西洋哲学史（中世）」「西洋哲学史（近世）」と細分化されており，それぞれの学部の卒業要件のうちに，「ギリシア語」か「ラテン語」の少なくとも一方が必修となっていたが，現在では，「西洋哲学史（古代）」「西洋哲学史（中世）」「西洋哲学史（近世）」は変わらないが，「哲学」では，卒業要件から，「ギリシア語」「ラテン語」がはずされた代わりに，「哲学」の修士課程に入学した者のうち，学部生時代に，「ギリシア語」「ラテン語」「論理学」を履修していない者は，修士課程に在籍中に，「ギリシア語」「ラテン語」「論理学」の少なくともいずれか１つを履修するがもとめられている．つまり，「ギリシア語」「ラテン語」「論理学」が，修士論文を書く条件としてもとめられている，ということである．

5) このことは，あくまでも，「哲学」という学問分野のことであり，「哲学」という学問分野でないのならば，これで通用するのかもしれないが，私にはその判断をする資格がないので，「哲学」という学問分野以外に関する判断は差し控える．

6) これは，後にわかるように，アリストテレスには，「根本姿勢」という考え方がある，という解釈をひねり出すためかと思われる．それを意図していなかったとしても，結果としてそうなっている．しかも，それがうまくいっているとは思われないが，このことの検討は，本稿の課題ではない．

Studia Philosophiae et Boni Mores